

ロシアにおける書籍印刷
(第1回) その始まりから16世紀末まで

岩 田 行 雄

1 9 9 4 年 1 1 月 刊

早稲田大学図書館紀要第40号抜刷

ロシアにおける書籍印刷（第1回）

——その始まりから16世紀末まで——

岩 田 行 雄

目 次

はじめに

第1章 前史

第1節 印刷術の各都市への伝播

第2節 文字（活字）のちがい

(1) グラゴル文字による印刷

(2) キリル文字による印刷

①クラクフにおける印刷

②チェティニエにおける印刷

③ヴェネツィアにおける印刷

第3節 ロシアへの印刷本の渡来

第4節 ロシアにおける書籍印刷開始の遅れの原因と開始の動機

第2章 ロシアにおける書籍印刷の始まりから16世紀末まで

第1節 アノニムナヤ・チボグラフィヤ（無名称印刷所または匿名印刷所）

第2節 国営印刷所

(1) 栄光と受難—イヴァン・フォードロフとピョートル・ムスチスラーヴェツの時代

(2) 継承—ニキーフォル・タラーシエフとアンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャの時代

(3) 中断？—アレクサンドロフ村の時代

(4) 再開—アンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャの時代

第3節 16世紀の到達点

(1) 出版物の内容について

(2) 印刷部数について

(3) ヨーロッパの書籍印刷との若干の比較

①15世紀中の書籍印刷全体との比較

②ひとつの都市との比較

③ひとりの印刷業者（ひとつの印刷所）との比較

- ④ひとつのベストセラーとの比較
- ⑤16世紀ロシアの書籍印刷の数量的到達点

(以下は第2回以降の予定)

- 第3章 17世紀ロシアの書籍印刷
- 第4章 17世紀ロシアにおける書籍の流通
- 第5章 16-17世紀におけるリトワおよびベラルーシにおけるキリル文字による書籍印刷
- 第6章 16-17世紀のウクライナにおけるキリル文字による書籍印刷
- 第7章 18世紀ロシア帝国領内のキリル文字による書籍印刷
- 第8章 18世紀ロシア帝国領内の俗用文字による出版・印刷
- 第9章 18世紀ロシア帝国領内の外国語による出版・印刷

はじめに

世俗

ロシアの書籍印刷の歴史について調べてみることになったのはふたつの動機があった。ひとつはR. カンティロン著／津田内匠訳『商業試論』（名古屋大学出版会、1992年5月）が刊行された直後に同書にふれる機会があり、訳文と解説のすばらしさも手伝って18世紀ヨーロッパ社会の躍動感あふれる魅力に大いにひかれたことであった。もうひとつは、そのひと月ほどあとに行われた私立大学図書館協会西洋古版本分科会例会後の津田内匠先生との会話にあった。この会話の中で1988年2月におきたレニングラード（現ペテルブルグ）にあるソ連邦科学アカデミー（現ロシア科学アカデミー）図書館の火災のことを話題にしたのだが、その時、1714年に開設された科学アカデミー図書館の所在地すらあやふやであった自らの不明を恥じ、18世紀の書籍文化全体について調べることにした。それがこの研究の出発点となった。

そして実際にとりかかってみると、18世紀をより正確に理解するためには17世紀へと、さらには16世紀へとさかのぼり、ついにはグーテンベルクの印刷術開始までさかのぼることとなった。だがそれは単に時代をさかのぼったということにとどまらず、西欧を中心にして発達した書籍印刷全体の中でロシアの書籍印刷がどのような位置にあったのかという点についての明確な認識をもあわせてもたらしてくれた。このような経過をたどるなかで、研究の対象は書籍印刷を中心にして地域、時代ともに当初より大幅

にひろがることとなった。

研究全体の構成は目次にも示したが次の4つの部分から成っている。

1. ロシアにおける書籍印刷の始まりから16世紀末までとその前史
2. 17世紀ロシアの書籍印刷と流通
3. 16—17世紀のリトワ、ベラルーシ、ウクライナにおけるキリル文字による書籍印刷
4. 18世紀のロシア帝国領内全域の出版

ソ連邦時代のロシアでは1950年代後半から書誌学の分野における研究およびその成果の出版活動が活発に行われるようになった。それは革命、内戦、粛清、第二次世界大戦と相ついだ長い困難な時代を経て、ようやく迎えた平和な時代に一斉に開花した趣きがある。それらの活動はイヴァン・フョードロフとピョートル・ムスチスラーヴェツによる1564年の『^{せいしと}聖使徒^が経^{（注1 ①）}』刊行から400年目にあたる1964年を節目にひとつの興隆期をむかえ、ひきつづく時代の研究の基礎を築きあげる。

この時代の代表的な出版物を何点か紹介すると、まずロシアにおける書籍印刷の始まりとイヴァン・フョードロフの印刷活動の全容解明を試みた歴史学者チホミーロフ他著『ロシア書籍印刷の始まり』^{（注2）}（1959年刊）がある。そして通史としては、ソ連邦を構成する各民族共和国ごとの出版史の集大成ともいべき芸術学者シードロフ編『ロシアの書籍印刷400年』^{（注3）}（1964年刊）がある。また目録としては、ロシアで17世紀末までに刊行された全点について現品調査にもとづいて作成された書誌学者ジョールノヴァ著『16—17世紀モスクワにおけるキリル文字による印刷書籍：総目録』^{（注4）}（1958年刊）およびコンダコフ他編『俗用文字による18世紀のロシア語書籍総目録：1725—1800』^{（注5）}全5巻（1962—1966年刊）+補巻（1975年刊）がある。このふたつの目録は18世紀以前の書籍文化を研究する場合には必要不可欠の目録である。継続出版物では1959年に出版されはじめた論文集『書籍：研究と資料』^{（注6）}が当時の研究者たちの結集をはかるうえで重要な役割を果たした。これはほぼ1年に2冊の割合で刊行されており現在も続いている。19世紀以前を研究対象

とする分野では1965年から科学アカデミー図書館の研究者を中心にして16—19世紀ロシアの書籍文化史全般にわたる学術論文集が^(注7)刊行されはじめ、新たに発見された資料についての研究報告や興味深い論文が次つぎと世に送り出されている。

第1章および第2章では以上の文献のほかに、カラターエフ、ルッポフその他の書誌学者たちの研究をふまえて論をすすめる。そして16世紀の歴史的背景にもふれながら当時の書籍印刷の全体像を描き出すことに努めたい。

第1章 前史

1564年、モスクワにおいてイヴァン・フォードロフ (Иван федоров) とピョートル・ムスチスラーヴェツ (Петр Мстиславец) による『聖使徒経』が刊行された。印刷地、刊年など出版事項が明記されたロシアで最初の印刷本である。グーテンベルクの『聖書』刊行 (1455年頃) から遅れること110年。ロシアでの印刷術開始がなぜこれほど遅れたのかについての研究は管見にふれていない。しかし、おおまかにではあるが筆者なりに次の三つの側面から考察し、前史としたい。それはまず第1に印刷術の各都市への伝播—地理的側面、第2に文字 (活字) のちが—技術的側面、第3にロシアへの印刷本の渡来—文化と物の流れの側面である。

第1節 印刷術の各都市への伝播

グーテンベルクによりドイツのマインツで始められた印刷術はドイツ国内をはじめヨーロッパ各地に比較的短期間のうちに広まっていった。

雪嶋宏一氏の研究によれば、15世紀末 (厳密には1501年4月10日) までに印刷が行われた都市は約250都市で、その内訳は「イタリア76、ドイツ語圏54、フランス47、イベリア半島32、ネーデルランド21、イングランド4など」^(注8)である。

R. プロクターが編纂した『大英博物館とオックスフォード大学のボド

〈表1〉

国名	最初に登場する印刷地	その年代	印刷が行われた都市数	1460年まで	1461—1470	1471—1480	1481—1490	1491—1500
ドイツ	マインツ	(n. a.1454)	51	1	6	16	16	12
イタリア	スピアコ	1465	73		4	45	16	8
スイス	バーゼル	(n. a.1468)	8		2	2	2	2
フランス	パリ	1470	39		1	7	15	16
オランダ	ユトレヒト	(1471~74)	14			8	4	2
ベルギー	アントワープ	1473	7			5	2	
オーストリア・ハンガリー	ブダペスト	1473	10			5	4	1
スペイン	ヴァレンシア	1474	24			6	13	5
イングランド	ウエストミンスター	1477	4			4		
デンマーク	オーデンセ	1482	2				1	1
スウェーデン	ストックホルム	1483	3				1	2
ポルトガル	ファロー	1487	4				2	2
モンテネグロ	チェティニエ近郊のリカ	1493	1					1
	エ		240	1	13	98	76	52

(注9)

リアン図書館所蔵インキュナブラの索引』では240の都市名が国別、年代順にわかりやすくまとまっているので、〈表1〉にそれを要約しておおよその状況を示しておきたい。ただしこの索引を利用する場合、国名とその領土が1898年当時にもとづいているのでポーランドのクラクフ（(n. a.1476)）やチェコのプラハ（1478）はオーストリア＝ハンガリー帝国に含まれており、モンテネグロは独立した国名として登場することなど現在とのちがいをあらかじめ考慮に入れておかなければならない。また〈表1〉の年代と数字はあくまでも大英博物館とボドリアン図書館所蔵のインキュナブラに限定されるもので、インキュナブラ全体について完全に示すものではないことをおことわりしておきたい。

〈表1〉をみると1470年までに印刷術が伝わった都市数は13都市と少ないが、1480年までの10年間で急速に広まり、1490年の時点でその数は187都市となり、その後も徐々に広がりつづけた様子がみてとれる。そして15世



図1 フランツィスク・スコリーナの肖像 『ロシア語聖書』のうち「シラフの子イイススの知恵書」(シラ書)1517年

紀末の時点ですでにポーランド以西のヨーロッパのほとんどの地域に伝わっていたことがわかる。

印刷術がロシアの周辺に及んだのは1520年代のことである。

1525年、ロシアの隣国でリトワ、ベラルーシ、ウクライナの一部にまたがるリトワ大公国の首都ヴィリノ(モスクワへ約750km)で出版事項を明記した最初の印刷本『聖使徒経』^(注10-①)が刊行された。刊行したのはベラルーシ人のフランツィスク・スコリーナ(ロシア名Франциск Скорина、ベラルーシ名 Францыск Скарына)で、かれはベラルーシ、リトワ双方の印刷術創始者とみなされている

^(注11)る。かれは重要な位置を占めているので『スコリーナ：記録と資料集』その他にもとづき少し詳しくふれておこう。

スコリーナはベラルーシで古くから経済及び文化の中心地のひとつとして栄えた西ドヴィナ河畔の都市ポーロツクの出身。生年は1490年頃と推定されている。父と兄はここで皮および毛皮の交易をしていた。初等教育を受けたのはおそらくギリシア正教会の教区付属小学校で、『時課経』を教科書にして読み書きを習った。^(注10-②)スコリーナはさらにポーロツクかヴィリノで教育を受け、大学に入るために必要な知識をラテン語で身につけた。当時大学の授業はすべてラテン語で行われていたからである。1504年に当時リトワと連合していたポーランドの首都クラクフ(1596年ワルシャワに遷都)^(注10-③)に行き、クラクフ大学の自由学芸部に入学する。自由学芸とは中世の三学(文法、修辞、弁証)、四科(算術、幾何、天文、音楽)をさす。卒業証書を得るために必要な勉強期間についての厳密な規定は中世も、この時代も

伝わっていない。ボローニヤ大学の例をみると現在のように全学部一律ではなく、学ぶ分野によつて違っており、法学は長く8年となっている。また学生の年令も10代から40代までという大きな幅があったことが伝えられている。

1364年に創立されたクラクフ大学は当初法律を中心とするボローニヤ大学の制度をとり入れて国家官吏を養成した。その後、事実上の再建と考えられている1400年の改革により、パリやプラハの大学をモデルとして神学研究をとり入れている。東欧の大学としては1348年に創立されたプラハ大学について二番目の歴史をもつ。これはペテルブルグの帝室科学アカデミー開設（1724年）より360年早く、モスクワ大学創立（1755年）に先んじること約390年である。クラクフにはそのほかに15世紀のなかばに天文学や数学の学校が設立されている。活躍した学者の中にミコワイ・コベルニク（ラテン名ニコラウス・コベルニクス 1473—1543）の名があげられており、かれがクラクフで活躍したのは1492年（注12-①）から1496年のこととされているが、1491年から94年まではクラクフ大学の学生であった。またクラクフではすでにふれたように1475年頃から印刷が行われており、最初の印刷所が設立されたのは1473—1474年とみなされている。クラクフにはその後いくつもの印刷所が設立され、他の小さな町にも印刷所は広がった。（注12-②）

このような時代的雰囲気の中、クラクフで学んだスコリーナは1506年12月14日に自由学芸の学士号(baccalarius)



図2 フランツィスク・スコリーナによる「ロシア語聖書」の標題紙（『創世紀』1519年）。「ロシア語の（Руска）」（実際は当時のベラルーシ語）という文字が刊本で初めて使われた。「ドクトル・フランツィスク・スコリーナ」の肩書きもある。

をうける。^(注10-④)1507年から1512年までかれは当時の学生たちがそうしたようにヨーロッパ各地のすぐれた大学をまわり、哲学、歴史、法学、博物学、医学の研鑽を積んだ。スコリーナが滞在したのはおそらくドイツ、チェコ、デンマークであった。そしてこの時期にヨーロッパのどこかの大学、おそらくはクラクフ大学で自由学芸の教授資格 (doctor) の学位をうけてい^(注10-⑤)る。1512年秋、スコリーナはイタリアのパドヴァ大学で医学の教授資格 (doctor) の試験を受ける^(注10-⑥)目的でパドヴァを訪れ、同年11月9日に合格している。短期間で合格したのは他大学での勉学年数を考慮されてのことであろう。またかれはパドヴァに来る以前にデンマーク王の書記をしていたことも判明して^(注10-⑦)いる。

1517年、スコリーナはプラハにやってくる。そこでかれはヴィリノの領地管理人ヤクブ・バビチと後援者バグダン・オニコフそれにおそらくはユーリイ・アドヴェルニク、兄イヴァンの援助のもとに自分の最初の印刷所を^(注10-⑧)設立する。そして自らベラルーシ語に翻訳した『聖書』を分冊で刊行し^(注10-⑨)はじめる。1512年から1517年はこのための準備期間と考えられている。

プラハでは1488年にすでにチェコ語の『聖書』が刊行されていた。チェコ語の『聖書』はその後も1489年 (プラハ近郊のクトナー・ホラ)、1506年 (ヴェネツィア) と刊行されていたのでスコリーナはそれらをギリシア語、ラテン語、ヘブライ語聖書とともに参考にすることができた。プラハはまた、ヴェネツィア、アウグスブルク、ニュルンベルクなど書籍印刷の中心地とつながりがあり、植字工や彫版師を雇い、活字や紙を調達するうえで都合^(注10-⑩)のよい立地条件にあった。

スコリーナは『聖書』全体 (旧約聖書と新約聖書) の刊行を意図していたと考えられているが、現存が確認されているのは1517年から1519年にかけて順次刊行された『旧約聖書』のうちの「創世紀」、「エジプトを出づる記」^(注13)など20巻 (23分冊) のみである。

1519年の末または1520年の初めにかれは祖国に帰りヴィリノで印刷所を設立した。これは東スラヴ地域 (ベラルーシ・ウクライナ・ロシア) で最初の

印刷所であった。スコリーナはここで1522年頃に『聖詠経』、『時課経』など「旅行携帯用小型本」21点を刊行する。^(注14)そして1525年に前述の『聖使徒経』を刊行する。

スコリーナの出版活動の根底にある理念はロシア人（ベラルーシ人のこと）庶民が英知や学問を理解することを手助けし、教えることにあった。したがってかれの出版物にはスコリーナ独自の注釈が付され、版画による挿絵が数多く使われている。

『スコリーナ：記録と資料集』では「スコリーナとモスクワ」の項目をたてて資料をあげ、1525—1533年頃にスコリーナがモスクワに出かけたという推論をしている。^(注10-12)目的は自らの書籍の普及と書籍出版の組織化にあった。だが当時のロシアにはその条件が整っていなかったという。いずれにせよ、かれは東スラヴの初期印刷術に大きな足跡を残し、後々大きな影響を与え続けた。

ロシアのすぐ隣りまで到達した印刷術はもう一方では遠く大西洋をこえ、1540年にメキシコで最初の印刷本『成人の手引き』が刊行され、その後も引き続き出版が行われている。^(注15)

以上、印刷術の諸地域への広がりについて述べてきたが、とくにヴィリノやメキシコの例をみると、ロシアにおける印刷術の開始が大幅に遅れたのは少なくとも地理的条件が主要な原因ではないことがわかる。

第2節 文字（活字）のちがいを

結論を先に述べると、文字（活字）のちがいは印刷術開始のおくれの理由にはならない。それは15世紀中にすでにグラゴル文字およびキリル文字による印刷が行われていたことが現存するインキュナブラにより確認されているからである。^(注16)^(注17)

(1) グラゴル文字による印刷

15世紀末からローマおよびヴェネツィアにおいて、ローマ教会によりそのスラヴ人主教管区のためにカトリックの典礼書がグラゴル文字によっ

〈表2〉 グラゴール文字およびキリール文字

グラゴール文字	数値	キリール文字	数値	ローマ字	グラゴール文字	数値	キリール文字	数値	ローマ字
Ⲁ	1	А	1	a	Ⲃ	500	Ф	500	f
ⲁ	2	Б		b	ⲃ		Ⲅ	9	th
Ⲃ	3	В	2	v	Ⲅ	600	Ⲇ	600	x
ⲃ	4	Г	3	g	ⲅ	700	ⲇ	800	ω
Ⲅ	5	Д	4	d	Ⲇ	800	Ⲉ		št
ⲅ	6	Е	5	e	ⲇ	900	ⲉ	900	c
Ⲇ	7	Ж		ž	Ⲉ	1000	Ⲋ	90	č
ⲇ	8	З	6	z	ⲉ		ⲋ		š
Ⲉ	9	З, 3	7	z	Ⲇ		Ⲍ		ъ
ⲉ	10	И	10	i	ⲇ		ⲍ		y
Ⲇ	10	(I)	10	i	Ⲉ		Ⲏ		б
ⲇ	20	Н	8	i	ⲉ		ⲏ		ě
Ⲉ	30	(K)		g	Ⲇ		Ⲑ		ju
ⲉ	40	К	20	k	—		ⲑ		ja
Ⲇ	50	Λ	30	l	—		Ⲓ		je
ⲇ	60	М	40	m	ⲂⲄ, Ⲅ		ⲓ	900	ε
Ⲉ	70	Н	50	n	ⲂⲄ		Ⲕ		q
ⲉ	80	О	70	o	ⲂⲄ		ⲕ		je
Ⲇ	90	П	80	p	ⲂⲄ		Ⲍ		je
ⲇ	100	Р	100	r	—		ⲍ	60	ks
Ⲉ	200	С	200	s	—		Ⲏ	700	ps
ⲉ	300	Т	300	t	Ⲇ		ⲏ	400	υ
Ⲇ	400	У, 8	400	u					

〈木村彰一著「古代教会スラブ語入門」(白水社)により作成〉

て印刷されはじめていた。

ペテルブルグの国立公共図書館所蔵のグラゴール文字によるインクナブラの中に一冊の不完全な「ミサ書」がある。これはクロアチア語で書かれたもので、最終葉の裏面に1483年2月12日の日付がある。印刷地は明記されていないが、研究によりヴェネツィアと推定されている。^(注18)

この「ミサ書」はロシアで所蔵されているグラゴール文字によるインクナブラとしては最も早い年代のものと考えられる。

(2) キリル文字による印刷

① クラクフにおける印刷

1491年、クラクフにおいて『八調経』^{はつちようけい(注1-②)}と『時課経』^{じ か けい(注1-③)}の各1点が刊行された。このほかに印刷の年月日と印刷地はどちらも明記されていないが、上記の2点と同じ1491年にクラクフで刊行されたものと推定される『三歌斎経』^{さん か さい(注1-④)}と『五旬経』^{ご じゆんけい(注1-⑤)}が各1点ある。さらに現品は伝わっていないが1491年刊行の『聖詠経(補足付き)』^{せいえいけい(注1-⑥)}が1点ある。以上の5点についてはカラターエフ^(注19)が作成した記述目録に詳しく記載されている。

最初の2点の巻末には印刷者シュヴァイポリト・フェオーリ(Швайпольт Феоль)の名がある。かれは伝えられるところによるとクラクフの金細工師のギルドの一員で、一時期金糸で刺繍をする仕事をしていた。その後運よく事業家そして技術者＝発明家となり、1491年から印刷を手がけた。フェオーリは1491年の2月初めに当時クラクフ大学の学生であったルドルフ・ボルスドルフと契約をかわし、ボルスドルフからキリル文字の活字の提供を受ける。この活字は教会スラヴ語の特徴である行の上につける発音区分符号が字母とは別個に多数用意されていた。

上記の2点を刊行した直後にフェオーリは異端審問にかけられる。そして保釈はされるが、裁判費用の負担と「贖罪の誓い」の読み上げを強いられる。その後かれはクラクフの町を捨てて鉱山で働き、二度と印刷にたずさわ^(注20)ることはなかった。

② チェティニエにおける印刷

モンテネグロのチェティニエにおいて1494年に『八調経』の前半部分（1調から4調まで）が、ついで1495年に『聖詠経（補足付き）』が刊行された。いずれもモンテネグロの軍司令官ゲオルギ・チェルノエヴィチの命令により印刷された。^(注21)印刷者はモンテネグロ出身の修道司祭マカーリイ（Макарий）で、印刷所には8人が働いていたと伝えられているが、印刷者マカーリイの人物像や活動についての記録はない。^(注22)

ウンドーリスキの編年目録によれば1494年に『八調経』の後半部分（5調から8調まで）が刊行されているが、現品は伝わっていない。^(注23)

またカラターエフの記述目録によれば1493年から1495年にかけて刊行された『祈禱書（聖事経）』の数葉が帝室公共図書館に所蔵されていた。^(注24)

1499年、モンテネグロはトルコ人により占領され、印刷活動の中止を余儀なくされた。

③ヴェネツィアにおける印刷

カラターエフの記述目録によればヴェネツィアにおいて1493年に『時課経』が刊行されている。印刷者名はアンドレアス・デ・トレザニス・デ・アズーラ。刷了の日付は1493年3月13日。これはかつてBreviarium（カトリックの聖務日課〔日禱〕書）の名称でニュルンベルク市庁舎の図書館に所蔵されていたが、カラターエフが目録を作成した時点ですでに同所には存在していない。^(注25)

なお、ヴェネツィアにおいては16世紀になってからモンテネグロの軍司令官ボジダル・ヴコヴィチ（Божидар Вукович）、さらにはその息子のヴィンチェンツォ・ヴコヴィチ（Винченцо Вукович）を中心にキリル文字による出版活動が活発に行われた。^(注26)

ついでながらふれておくと、当時最大級の国際都市であり印刷の一大中心地であったヴェネツィアにはギリシア語書籍の印刷所が複数存在した。それらはこの時代だけではなく歴史的にみても文化面において大きな役割を果たしている。代表的な出版業者であるアルド・マヌーツィオ（ラテン名アルドウス・マヌティウス）はギリシア人学者の援助を経てプラトン、アリス

トテレスをはじめとするギリシア語テキストを刊行し西ヨーロッパの学者を対象としていた。これに対しその他の印刷所は古典や教父の著作からきわめて安価な教科書にいたるまであらゆるギリシア語書籍を刊行し、それは東方教会世界全体への印刷本の主要な源泉となった。^(注27)

第3節 ロシアへの印刷本の渡来

ロシアへの印刷本の渡来に関して研究文献にみられる最も早い年代は1472年である。これはイヴァン3世（在位1462-1505年）

が最初の妻の死後、再婚の相手として選んだビザンツ最後の皇帝の姪ゾエ・パラエオログス（のちにソフィア・フォーミチナと改名）をローマからモスクワに迎えた年である。

チホミーロフは『ロシア書籍印刷の始まり』の中で「イタリアで出版されたギリシア語の本が皇妃とその随員一行によってもたらされた可能性がある」と述べている。そしてさらに「15世紀末から16世紀前半にかけてモスクワに住んでいたかなり多数のイタリア人やドイツ人の熟達した職人たちが、ラテン語、ギリシア語およびその他の言語の印刷本のなにかのひと揃いを持っていたことは疑い難い」と推論している。また1518年から1555年までの後半生をモスクワで送ったマクシム・グレーク（ギリシア人マクシムの意）の仲介によりロシア人たちが印刷本と初めて出会ったこと、16世紀にロシアで最初の印刷所がモスクワに設立された時点では印刷本はす



図3 ポジグル・ウコヴィチ版『奉事経』
ヴェネツィア 1519年

でに目新しいものではなかったことにもふれている。^(注28)

このマクシム・グレークは16世紀のロシア文化においては特異で例外的な存在だったのでW.H.マクニール著『ヴェネツィア』その他により少し詳しくふれておこう。

マクシム・グレークは俗名ミハイル・トリヴォリスという人物と同一人と推定されている。かれは1470年頃にギリシア（当時はアルバニア領）のアルタという町でギリシア人の名門の家庭に生れた。^(注29)ギリシアで教育を受けたのち1490年代前半にはすでにイタリアに渡っており、ヴェネツィア、パドヴァ、フェラーラ、フィレンツェの各地で過ごしている。これにミラノを加える説もある。イタリア滞在中にかれは前述したヴェネツィアの文人で当時イタリア最大の出版業者であったアルド・マヌーツィオ（ラテン名アルドゥス・マヌティウス、1450-1515）、詩人で人文主義者のポリツィアーノ（1454-94）、人文主義者のピーコ・デッラ・ミランデラ（1463-94）、コンスタンティノーブル生れの文人ヤノス・ラスカリス（1445-1534）らと親交を持った。とくにマヌーツィオのもとでは1496年から1498年にかけてギリシア語テキストの編纂を行っている。またフィレンツェでは1502年から1504年にかけてドミニコ修道士会の聖マルコ修道院で過している。この聖マルコ修道院はジローラモ・サヴォナローラ（1452-1498）が1491年から修道院長をつとめたところで、内部に多数の写本をもつ図書館がある。1505年からは祖国にもどりギリシア正教の総本山であるアトス山のバトペディウ修道院の修道士となり、修道士名マクシムを名乗る。このバトペディウ修道院にも重要な書簡や写本を多数所蔵する図書館がある。1515年にロシアのヴァシーリイ3世（在位1505-1533年）からギリシア語書籍の翻訳者の派遣要請をうけた当局は、1517年にマクシムをモスクワに派遣した。かれは1518年に到着し1555年に没するまでロシアにあり、ギリシアにもどることはなかった。^(注30)かれは何年か仕事をしたらギリシアに帰るつもりでいたようだが、ヴァシーリイ3世はそれを許さなかった。

博識なマクシムのまわりには知識を求める人々が集まった。しかしなが

ら、やがてかれはロシアにおける教会改革をめぐる争いにまきこまれることになる。修道院は領地やその他の利益をもたらし資産をもつべきではないと主張する人々と考え方が一致していたマクシムは、修道院領擁護派によって1525年に異端として裁かれ有罪の判決をうける。さらに6年後の1531年に再度裁判をうけ、またも有罪とされる。その後1551年に釈放されるまでかれは監視をうけながらも文筆活動を続けた。

チホミーロフ以外の文献では、チホミーロフその他から資料提供や示唆をうけて『モスクワとロシア文化の源流』を著したアーサー・ヴォイスがゾエの輿入れに関連して次のように述べている。「彼女とともに多数の聖職者、画家、建築家、あらゆる種類の職人などがローマ、コンスタンティノープル、その他の都市からモスクワにやってきた。彼らはギリシア語、ラテン語の書籍、きわめて貴重な古い写本、イコーナ、聖堂内の芸術性豊かな聖具などを持参し、こうしてイヴァーン雷帝の「失われた蔵書」と総主^(注31)の聖具保管所の基礎が作られた」。

散 イヴァン3世はそれ以来、建築家をはじめ宝石細工師、金属細工師、武器製造人などを獲得するために数回にわたってイタリアへ使節を派遣し、イヴァン3世とソフィアとの子であるヴァシーリィ3世もひきつづき同様の策^(注32)を講じている。

1992年にモスクワで出版された『ルーシ、ロシアそしてソ連邦の外交千年』によれば、モスクワ大公国は1469年2月11日にローマ教皇庁との間で、また1485年にヴェネツィア共和国との間で親書を交換している^(注33)のでその際の往来に付随して印刷本を含む文物が渡来した可能性はあるが、いまのところ明らかではない。ただし当時はまだ印刷本を写本の代用物とみなす傾向が強く、写本の方が貴ばれたので、印刷本が贈り物に加えられる可能性は低かったものと思われる。

第4節 ロシアにおける書籍印刷開始の遅れの原因と開始の動機

以上、三つの側面からみてきたかぎりではロシアが印刷術で大幅におく

れをとらなければならない状況にはなかったといえる。もちろん、印刷を行うためにはまず第一に印刷機、活字、活版印刷用インク、紙などの供給と印刷技術者の確保という技術面の条件を満たさなければならない。そして出版文化が存続するためにはそれを支える社会的・経済的基盤、いいかえれば社会的成熟が必要である。具体的には教育の普及と識字率の高さ、文化的要求の度合い、勤労市民および農民層まで含めた購買力、流通機構の確立状況などである。

だが、ロシアの場合にはこれらの諸条件以前に印刷術の開始を大きく遅らせたふたつの要因を考えることが出来る。ひとつはうち続いた戦乱と国内の権力争いによる社会の不安定、もうひとつは宗教的ないしはその他の理由による書籍印刷への少なからぬ反対者たちの存在である。^(注34)

しかしながら16世紀半ばに国家の政治的および宗教的必要性から上述の諸条件や事情を超越して、モスクワにおいて国策としての書籍印刷が開始される。その必要性とは第一にモスクワ大公国^{トル}の領内のすべての教会に対して、異端発生の原因となる多数の歪曲や誤りを含む写本にかえて、訂正され確定された印刷本による単一の奉神礼書(カトリックの典礼書にあたる)、即ち「国定」版を与えることであった。第二は急速に増大しつつあった奉神礼書に対する需要増に応えるためであった。それはおもにイヴァン4世(雷帝・在位1533—1584)が1552年にカザン汗国を征服したことに起因して^(注35)いた。新たな支配地域ではイスラム教のモスクや廟が破壊され、それに代って教会や修道院が建設された。そしてタタール人たちは洗礼を受けることを強要され、洗礼を拒む者は市の城塞内に住むことを許されず、キリスト教徒化は強制的に行われた。^(注36)ところが急増した奉神礼書への需要に対して従来の写本の製作量だけでは到底まかないきれない状況にあり、この点からも大量生産体制の確立は急務となっていた。

こうして始められた印刷書籍の販売に関してはイヴァン4世が「聖詠經、福音經、^(注1-③)聖使徒經その他の聖なる書物を市場で買い求めて教会に備えるよう」命令を出している。^(注37)そしてこの強制的な販売方法は1640年にミハイル

・ロマノフ（在位1613—1645）の命令によってモスクワ印刷局の地下室^(注38)に売店が開設されるまで続けられる。ただしこの強制的販売は「聖なる書物を売って金儲けをしてはならない」という宗教上の考えにより手数料がなく、原価販売・原価回収というものであった。モスクワ印刷局がコスト意識を持ち利潤導入をはかったのは、印刷所が火災にあって再建をした1634年からとされている。^(注39)

「イヴァン4世の命令と府主数マカーリイの祝福」という名の国家権力の指示により開始されたロシアの書籍印刷は、のちにみるように私営の印刷所を中心に発展をとげた西欧諸国とはかなり異なった出発点からの特殊な状態を長い間ひきずり続けることになる。

第2章 ロシアにおける書籍印刷の始まりから16世紀末まで

ロシアにおける書籍印刷の始まりについての情報がきわめて少ないため過去には当然のことながら研究者のあいだに意見の相違が多数存在した。しかしながら冒頭で紹介した『ロシア書籍印刷の始まり』と『ロシアの書籍印刷400年』が刊行されたことにより、基本的な問題点はほぼ整理されたものと考えることができる。ここでは大筋でチホミーロフ及びシードロフの見解にもとづいて論をすすめるが、その後の研究において進展があった事柄や重要と思われる異った見解についてはできるだけ本文か注のどちらかに含めるようにしたい。そのためにまずロシアの研究者たちが典拠としている資料についてふれておく。

第1に、イヴァン4世によるものとしては次の項目で述べる「アノニムナヤ・チボグフィヤ」を設立した時期の書簡。

第2に、書籍印刷の当事者が書き残したものとして1564年『聖使徒経』のあとがき及び1574年刊リヴォフ版『聖使徒経』のあとがき。^(注40)^(注41)

第3に、1847年にモスクワの北東約560kmにあるトーチャマで発見された《ロシア年代記作者》と呼ばれる古文書。^(注42)

第4に、ふたつの『物語』。ひとつは1613年以降に書かれた『印刷事業考

案についての真実の物語』^(注43)もうひとつは1645年以降1651年頃までに書かれた『真実の物語と簡潔な叙述』^(注44)で、これは前者の改作とみなされている。

第5に、当時の刊本そのものも重要な資料である。^(注45)

そのほかに、外国人の著作で語られている当時の証言がある。ただしこれは個々の証言に矛盾する内容があるため二次的な資料と考えられている。^(注46)

以上の諸点をふまえて、次に「アノニームナヤ・チボグラフィヤ」「国営印刷所」の順でロシアにおける初期の印刷活動について述べる。

第1節 アノニームナヤ・チボグラフィヤ(無名称印刷所または匿名印刷所)

チホミーロフによればモスクワにロシアで最初の印刷所が設立されたのは1553年頃と推定されている。^(注47)場所についてはいくつかの仮説がある。第1はクレムリン(内城)の中のニコラ・ガストゥンスキー教会の内部に工房がつくられたというチホミーロフの説。^(注48)第2は、イヴァン4世の側近グループ「選良会議」の中心人物のひとりで、クレムリン内の皇室付属ブラゴヴェーシチェン(生^{しょうしんじよ}神女福音祭の意、カトリックの聖母受胎告知)寺院の司祭シリヴェーストル(Сильвестр)の邸内にあったとするネミロフスキの説。その他に、モスクワにふたつの印刷所一國と総主教のと一が同時に存在したのではないかというコリャダー(Г.И.Коляда)の説がある。かれはまた、モスクワ以外にトロイツェ・セルギエフ修道院にマクシム・グレークを中心とした印刷所の存在の可能性を主張している。だがこれらの仮説はいずれもまだ確証を得ていない。この印刷所は名称がなく、アノニームナヤ・チボグラフィヤと呼ばれており、実験的な印刷所だったのではないかとみなされている。^(注49)アノニームナヤ・チボグラフィヤは完全な国営ではなく、半国営であった。^(注50)1565年頃まで存在したものと推定されており、1563年に新たに設立された国営の印刷所と一時期併存していたと考えられている。アノニームナヤ・チボグラフィヤで印刷されたものには出版事項がないが、活字や飾り模様、本に残されている書き込み、紙の透かし模様などの研究により、『三歌斎経』1点、『福音経』3点、『聖詠経』2点の現存が

確認されている。そのほかに19世紀の書誌学者A.E.ヴィクトロフが所有していたと考えられる『五旬経』1点が、実現されなかった出版物のためにかれが準備した一覧表に記されているが現物は伝わっていない。ただしヴィクトロフ自身がほんの一部分を複製したものが残されている。^(注51)

シードロフはこれら初期印刷本の特徴として、部厚く重い、黒と赤の二色刷り、時には手彩色がほどこされている、写本に似ていることなどを挙げている。アノニムナヤ・チボグラフィヤの刊本の段階において細



活字、中活字、太活字その他で少くとも五種類の異なる活字が識別されている。またネミロフスキの見解によれば、字母と発音区分符号は別個ではなくひとつの活字になっていたという。推定の刊年と順序は主要な研究者の間でも異なっている。（図4参照）

図4 アノニムナヤ・チボグラフィヤの中活字による『福音経』 推定刊年は1555年頃（ジョールノヴァ説）、1553—55年頃（プロターシエヴァ説）、1555—1560年（シードロフ説）、1558—1559年（ネミロフスキ説）など。

『400年史』では1556年に、この印刷所のためにノヴゴロドにおいてマルシャ・ネーフエージェフ（Маруша Нефедьев）と呼ばれる印刷のマステル^(注52)ルがイヴァン4世の委託を受け、かれがさらにヴァシューク・ニキフォロフ（Васюк Никифоров）というマステルを連れてきたとある。だがその後の研究ではマルシャ・ネーフエージェフが「モスクワからノヴゴロドへ派遣された」とあり、その目的は教会の説教壇のための石材を検査することであった。そしてノヴゴロドで優れた彫刻師に出会い、イヴァン4世の委託を受けモスクワに伴って来たのがヴァシューク・ニキフォロフであった。^(注53)

アノニムナヤ・チポグラフィヤには数人が働いていたであろうということが、一冊の本の中に見出される相違点により推定されている。^(注54) 技術的な側面ではアモソフが生産技術の安定性ととまもり具合からみて、植字工、印刷工とその助手のインク塗り工、解版工の分業がすでに確立していたと推測している。^(注55)

シードロフの見解によれば、1550年から1560年代の初めにかけてイヴァン・フョードロフがアノニムナヤ・チポグラフィヤで印刷技術を学んだことは疑いの余地のないものとされており、『イヴァン・フョードロフ伝』の著書ネミロフスキも「1553年頃から1562年頃にかけてアノニムナヤ・チポグラフィヤで働いていた」と推定している。^(注56)^(注57)

またシードロフは「ソビエト歴史学の現在の水準のもとで、われわれは諸事実に基づいた確かさによって16世紀モスクワの最初の印刷者たちはいかなる直接的な“先生”をも持たなかったと断言できる」と述べている^(注58)（傍点引用者）。ここでいう“先生”とは外国人のマステルをさす。ただしこの表現は「モスクワの」という部分に注意をはらって読まないと、すべてのロシア人印刷者たちが“直接的な先生”をもたずに独自に印刷術を学び出したとの解釈を導き出しかねないし、現にそのような文章もみうけられる。

二人のマステルがアノニムナヤ・チポグラフィヤに招致されたことはすでに述べたところであるが、シードロフをはじめロシアの研究者たちはこの二人がどこで誰から印刷術を習得したかについてはふれていない。

一方でシードロフは1470年代にはすでにノヴゴロド派のロシア人絵師たちの集団がポーランドのクラクフの主教座聖堂の小礼拝堂や宮殿の一室にフレスコ画を描いて働いていたこと、15世紀に同じくポーランドのルブリン、サンドミエシュその他でロシア人の職人たちが働いていたことに言及している。そして前述のフェオーリが自らの印刷本を携えてこれらのロシア人たちを訪ねることができたのではないかとの推測もしている。^(注59) このような結びつきの中でノヴゴロドに印刷術が伝えられた可能性も多少は考えられる。しかしながら印刷所の存在や出版物に関する新資料の発掘がないかぎ

り、現時点までの研究ではロシアにおける書籍印刷の始まりはノヴゴロドでもその他の都市でもなく、モスクワにあるとの考え方がとられている。^(注60)

第2節 国営印刷所

国営印刷所は1563年に設立された。これはアノニムナヤ・チボグラフィヤ設立から10年、イヴァン4世の即位から30年目にあたる。国営印刷所はいつの時点からかは不明だが、モスクワ印刷局というより大きな組織の一部として組み込まれている。モスクワ印刷局が設置された年代についても特定されていない。『ソビエト歴史百科』第11巻(1968年刊)では「最初のモスクワ印刷局は1553年頃に設置された」とある。^(注61)しかしながら『書籍百科』(1982年刊)によれば、モスクワ印刷局についての記述がロシアの文献にあらわれたのは1588年のことである。^(注62)またドイツ人ヘンドリッヒ・シュターデンが残した1565年—70年のモスクワについての記述の中では、モスクワ印刷局は17世紀と同じニコリスカヤ通りの北側にすでに存在している。^(注63)^(注64)

アノニムナヤ・チボグラフィヤが閉鎖されたあとは、モスクワ大公国においては印刷所はこの国営印刷所1ヶ所だけであった。書籍印刷を公式に禁じてはいなかったが、おかれている状況は禁止されているも同然であった。第3章で後述する総主教ニーコン（Никон）およびシメオン・ポロツキイ（Симеон Полоцкий）^лが関与してそれぞれ短期間存在したふたつの例外的印刷所を除けば、ロシアの17世紀末までの書籍印刷は「国営印刷1ヶ所への独占的集中」の状態にあった。この印刷所で働くマステルや職人たちはすべて皇帝の勤務員であった。^(注65)

国営印刷所の16世紀末までの活動は明確に四つの時期に区分される。つぎにその四つの区分にそって述べる。

(1) 栄光と受難—イヴァン・フョードロフとピョートル・ムスチスラーヴェツの時代

イヴァン4世の命令で国庫からの支出により1563年に設立された印刷所はただちに活動を開始した。そして翌1564年に『聖使徒経』が刊行された。

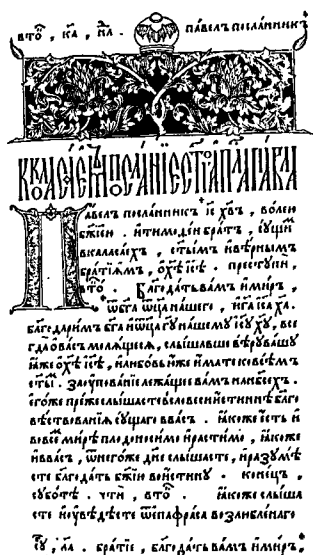


図5 1564年刊『聖使徒経』

より正確には1563年4月19日に印刷を開始し、1564年3月1日に刷了している。この『聖使徒経』はフランス製の白い光沢紙に印刷された268葉からなるフォリオ版で、6葉だけはページ付けがされていないが、そのほかの262葉はキリル文字のアルファベットによるページ付けがされている(表2参照)。1985年までに62部の現存が確認されているが、そのうちで紙のサイズが印刷時の原状に最も近いと思われるのはリヴォフの国立ウクライナ美術館所蔵のもので、28.5×19.3cmである。標題紙はなく、黒と赤の二色刷りである。『聖使徒経』は

ロシアで初めて印刷地、刊年など出版事項が明記された刊本であることから歴史に残る記念碑的出版物とされている。

この栄光を担った印刷者はイヴァン・フォードロフとピョートル・ムスチスラーヴェツのふたりであった。イヴァン・フォードロフは前述の印刷工房が創設されたと推定されるニコラ・ガストウンスキー教会の輔祭の職にあった。当時、補祭の職務には子供たちの教育も含まれており、そのことがのちにウクライナのリヴォフで『初等読本』を刊行する基盤となっている。生年および生誕地はともに不明である。チホミーロフはイヴァン・フォードロフが没した1584年(ネミローフスキ説は1583年)に上の息子が成年に達しているところから、享年はおそらく50才をこえていなかったであろうとみている。これに対して『イヴァン・フォードロフ伝』では推定した経歴から逆算して生年は1510年頃とされているがこの経歴には大きな問題点が含まれている。ネミローフスキはクラクフ大学の1523年の学士号

授与者リストの中から無理をすれば《Joannes Theodori Moscus》と読めるかも知れない程度の人名をとりあげて、ただちに《ロシア人イヴァン・フォードロフ》と同一人物と断定しその上にいくつもの仮説を積み重ねている。そして当時は15～18才で入学し、2～3年で学士号（baccalarius）を受けることができたであろうから1510年頃に生まれたと推定している。だが二人を同一人物と判断しうる記録や資料はなにもない。さらにイヴァン・フォードロフの名がモスクワの資料に記録されているのは1563年からであって、それ以前はまったくなにもない。大学に入るための中等教育やラテン語の教育を当時のロシアのどこで受けることができたのか、またカトリック教徒が支配する敵国への留学が一般的に可能であったのかなどの歴史的視点による教育事情の検討という基本的問題にもふれてない。ネミローフスキのこの仮説は結局ベラルーシ人のフランツィスク・スコリーナを意識してロシア人イヴァン・フォードロフの「学歴」と経歴を強引に作りあげたものにほかならず、チホミーロフ説の方が妥当である。

上記二人以外に印刷所で働いていたであろうところの人物名は伝わっていない。主要な人物以外の人名が伝わっていないのは、このあとの時代もひとつの例外を除いてほぼ同様である。^(注68)

『聖使徒経』は出版事項のほかにもうひとつ、印刷者による「あとがき」が歴史的に重要な内容を有していることはすでに紹介したところである。3ページにわたる「あとがき」の内容は情報が少ないロシアの書籍印刷の草創期に関する貴重な資料であり、前述のふたつの『物語』も主要な部分はこの「あとがき」に拠っている。

チホミーロフは『ロシア書籍印刷の始まり』の中でこの「あとがき」に含まれる情報を次の6点に要約している。

1.《書籍印刷のマステル》探しはカザン汗国征服後、即ち1552年のあとに始められた。

2.聖なる書物の正確で単一のテキストを与えるという願望がモスクワ印刷所創設の起因であった。

3.書籍の印刷は他の国々、まず第1にギリシア、ヴェネツィア共和国、イタリアの出版物の様式によることが考えられていた。

4.『聖使徒経』はイヴァン4世の命令と府主教マカーリイの祝福により印刷された。したがってこれは公式な版であった。

5.書籍印刷のために印刷所が建設され、国庫からの支出が行われた。

6.印刷者はふたりのロシア人、イヴァン・フォードロフとピョートル・チモフェーエフ・ムスチスラーヴェツであった。^(注69)

以上6点のほか、筆者としては前述の「聖なる書籍を市場で買いもどめるように」とのイヴァン4世の命令をつけ加えておきたい。

ところでこの『聖使徒経』が刊行された1564年の12月に異変がおきる。シミーン他著『イヴァン雷帝時代のロシア』はその概略をつぎのように伝えている。

12月3日、イヴァン4世は聖地巡礼のためモスクワ近郊のコロメンスコエ村にむかった。だが通常とは異なり、皇妃と子供たちを同伴し、聖像画、十字架のみならず、宝石類、衣服、《自己のすべての国庫金》^(注70)を携えての旅立ちであった。警護には貴族および士族の中から選ばれた者たちが完全武装をしてあたっていた。イヴァン4世の一行はコロメンスコエ村からモスクワの北東約70kmにあるギリシア正教の総本山トロイツェ・セルギエフ修道院を経由して、さらに東北東に約35kmすすんでアレクサンドロフ村に着く。この村には父ヴァシーリイ3世の時代からの別邸があり、イヴァン4世はここに留まる。

翌1565年1月3日、イヴァン4世は二通の書簡を持った使者をモスクワに送った。一通は府主教にあてた親書であった。そこには貴族、士族、官吏たちの裏切りと国家がこうむった損害が列举されていた。高位聖職者たちの罪は皇帝が罰することを望んだ者たちをかばったことであった。そしてかれは退位を表明していた。もう一通の特別書簡はモスクワの商工民たちに宛てたものであった。その中でイヴァン4世は、かれらにはなんら疑いがないこと、かれらは怒りや不興の対象とはなっていないことを表明し

ていた。親書は軍人と商工民の集会で公表された。この集会はゼムスキー＝ソボール（全国会議）を思い起こさせるものであった。1533年にヴァシリイ3世が没して以来、幼いイヴァン4世（1530年生れ）をよそに凄惨な権力闘争をくりかえしてきた貴族たちが再び権力を強めることを恐れた集会参加者たちは、府主教アフナーシィを仲介者に立ててイヴァン4世をモスクワに呼びもどすことを願った。

2月半ばイヴァン4世の一行はモスクワにもどった。この時点を境に力関係は大きくかわりはじめ、やがてイヴァン4世の絶大な権力が確立することになる。ところで伝記の中にはイヴァン4世がモスクワにもどった時の様子として「頭髮もあごひげもまったくなく、まるで別人のようであった」という話が伝えられている。原因は「心身の疲れ」「激しい怒り」「同情をひこうとした茶番」などの解釈があるが真疑のほどは不明である。

このような事件のあとで、1565年に『小時課経』の初版と第二版が相次いで刊行される。これらは八ツ折の小型本で、教会向けではない、モスクワで初めての一般向けの出版物であった。初版は1565年8月7日に印刷を開始し、同年9月29日に刷了している。第二版は印刷開始が1565年9月2日、刷了は同年10月29日なので、9月2日から29日までのほぼ1ヶ月間は同時に印刷が行われている。のちにみる当時の作業速度から判断して、複数の印刷機と複数の印刷スタッフのチームが存在していたものと考えられるが、何台の印刷機を所有していたかは不明である。

本来ならば栄光を担ったはずのイヴァン・フォードロフとピョートル・ムスチスラーヴェツのふたりは、わずか3点を刊行しただけでこのあとモスクワを去っている。1574年にウクライナのリヴォフでイヴァン・フォードロフが刊行した『聖使徒経』の「あとがき」によれば、ふたりは皇帝そのひとからではなく、上層部、高位聖職者、先達らの多数から迫害をうけ、敵意と嫉妬から「異端」の非難をあげせられてモスクワを去ることを余儀なくされたという。^(註71)ふたりがモスクワを去った日は特定されておらず、1565年10月29日から1568年7月8日までの間とされている。これはモスクワで

『小時課經』第二版が刷了した日からベラルーシのザブルドフでイヴァン・フョードロフが次の出版物である『福音經』の印刷を開始した日の間である。^(注72)イヴァン・フョードロフのその後の印刷内容からみて、かれらはモスクワからある程度の印刷用具を持って国外へ立ち去ることができたものと考えられている。^(注73)

なお、国外へ去ったふたりのその後の印刷活動については、16—17世紀のリトワ、ベラルーシおよびウクライナにおけるキリル文字による書籍印刷について述べる「第5章」と「第6章」でふれる予定である。

(2) 継承—タラーシエフとネヴェージャの時代

イヴァン・フョードロフとピョートル・ムスチスラーヴェツがモスクワを去ったあと、このふたりの弟子であるニキーフォル・タラーシエフ(Никифор Тарасиев)とアンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャ(Анодроник Тимофеев Невежа)が印刷所をひきついだ。フョードロフが使用していた活字が残されたことは印字などの比較研究で明らかにされている。これはフョードロフが活字の母型または父型を持っていればそれで十分だったので、あえて活字を運び去る必要がなかったからではないかと考えられている。1568年に『聖詠經』が刊行されているが、この版はフョードロフの活字を使用している。^(注74)印刷開始は1568年3月8日、刷了は同年12月20日である。

この時代に印刷されて現存しているのは上記の『聖詠經』1点だけで、他の刊本についての情報は伝えられていない。

(3) 中断?—アレクサンドロフ村の時代

フョードロフとムスチスラーヴェツ以後初めての出版が行われようやく落ち着くかにみえたモスクワにおける印刷活動は、1568年の『聖詠經』を最後に長期にわたる空白の時代をむかえる。印刷所は前述のアレクサンドロフ村に移される。キセリョーフは「おそらく、敵対的で非道な行為を準備している書籍印刷への少なからぬ反対者たちが残存していたモスクワではなく、皇帝の別邸があるアレクサンドロフ村が印刷の場所選ばれたのであろう」^(注75)との見方をしている。いつ移されたかは不明である。いつまでア

アレクサンドロフ村に存在したかという点では、ジョールノヴァが1581年までとの見解を示している。^(注76)ただし、1568年の『聖詠経』以後にモスクワで印刷された書籍で現存が確認されているのは1589年に刊行された『三歌斎経』（印刷開始1587年12月20日、刷了1589年11月8日）である。

アレクサンドロフ村で印刷されたもので現存が確認されているのは、1577年に刊行された『聖詠経』（印刷開始1576年6月20日、刷了1577年1月31日）1点のみである。印刷者としては、アンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャの名前だけが伝えられている。

『聖詠経』以外に、この時代に刊行されたとみなされている『時課経』が1点存在する。1965年春に当時のレーニン図書館稀覯書部に持ち込まれたものだが、巻末の数葉が欠落していたため印字などの比較検討が行われた。その全経過は1967年にカーメネヴァの研究論文として『書籍：研究と資料』第14集に発表されている。それによると印刷者は『聖詠経』と同じアンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャ、刊年と印刷地については1577年と1582年の間にアレクサンドロフ村において、または印刷所がモスクワに戻った直後と推定されている。^(注77)

アレクサンドロフ村の時代についてキセリョーフは「19年間の中断」と定義している。^(注78)19年間とはモスクワで『聖詠経』が刊行された1568年12月と『三歌斎経』の印刷が開始された1587年12月の間をさす。この定義に対してカーメネヴァは「おそらく中断はなかった」との新しい見解を打ち出している。^(注79)これは『時課経』の鑑定作業にあたり、1560年代から1602年まで、即ちアンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャが印刷にたずさわった刊本の活字の同一性と摩耗の度合いを調べるなかで得た確信ともいうべきもので、さらなる新資料の発見に期待を寄せてのことである。

なお、シードロフは『ロシアの書籍印刷400年』の中で、ダマスキン・セミョーノフ＝ルドネフが見たと言及しているフョードロフ以後の出版物についてふれている。それはまず福音経と使徒書簡の「注釈書」と『グリゴリー・ナジアンジンの書』で、いずれも1560年代の刊行とされている。

また1577年には半帖（ロシアの1帖は紙24枚）の、アレクサンドロフ村でしか出版されなかったという大型の本に言及している。これは『皇帝イヴァン（4世）とスウェーデン王の間の休戦協定の写し』で、もし現存していればロシアで初めての非教会的（または世俗的）かつ法律・政治的内容の出版物となるはずのものと述べている。^(注80)しかしながら、これらはすべて現物が伝わっていないうえに他に詳しい記述がない。カーメネヴァもこの種の言及にはしばしば誤りが含まれているとの理由から考慮の対象外としている。^(注81)したがってここでは一応の紹介にとどめる。

1584年にイヴァン4世が没した。息子のフョードル1世が即位したが、実権は徐々に皇妃の兄ボリス・ゴドゥノフの手中に移る。1586年にはボリス・ゴドゥノフの友人であり、かれの信奉者であるイオフが府主教となった。キセリョーフは、より穏健でより教養があるボリス・ゴドゥノフが権力を手中に収めたことと、イオフが府主教になったことを、その後の書籍印刷の発展にとって重要な意義をもっていたとみなしている。^(注82)

（4）再開—アンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャの時代

モスクワで再開された印刷活動はアレクサンドロフ村の時代からひきつづきアンドロニク・チモフェーエフ・ネヴェージャが中心であった。このことはフョードロフの時代の技術がひきつがれ、生きつづけていたことを意味していた。

1589年1月26日、府主教だったイオフはロシアで最初の総主教となり、その直後にかれは恒久的な印刷所の建設に着手した。^(注83)こうしてモスクワにおける書籍印刷は、初めて安定した状況のもとで行われるようになる。

1589年から1600年末までに刊行されたのは次の7点である。

『三歌斎経』1589年刊（印刷開始1587年12月20日、刷了1589年11月8日）

『五旬経』1591年刊（同1590年8月26日、同1591年11月24日）

『八調経』第1部、第2部 1594年刊（同1592年6月4日、同1594年1月31日）

『聖使徒経』1597年刊（同1596年5月21日、同1597年7月4日）

『時課経』1598年刊（同1598年5月17日、同1598年7月27日）

『総月課経』^(注1-11) 1600年刊 四ツ折判（同1599年6月4日、同1600年6月29日）
 『総月課経』1600年刊 フォリオ判（同1599年7月13日、同1600年8月19日）

1600年刊行の2点は、ほぼ1年間にわたって作業が同時進行している。

第3節 16世紀の到達点

(1) 出版物の内容について

以上、アノニムナヤ・チポグラフィヤから16世紀末までの約半世紀にわたるロシアの印刷活動について述べてきたが、現存が確認されている出版物は1965年に発見された『時課経』を含め合計19点（19版）で、すべて奉神礼書である。その内訳は次のようになる。

福音経 3、聖詠経 4、三歌斎経 2、聖使徒経 2

時課経 4、五旬経 1、八調経 1、総月課経 2

ここには『聖書』は見当らない。国外に去ったフョードロフが1581年にウクライナのオストロークで『聖書』を刊行しているが、ロシアでの『聖書』の刊行は1663年まで待たなければならない。なお、先頃、この1663年刊の『聖書』が早稲田大学中央図書館の蔵書に新たに加えられた。第3章および第4章においてその紹介も兼ねて詳しく論ずる予定である。

(2) 印刷部数について

1600年までに刊行された上記19点のうち、幸いなことに1597年刊『聖使徒経』の「あとがき」に印刷部数が1,050部と明記されている。^(注84)

アモースフはこの数字と『ジョールノヴァの総目録』の記述を手がかりに下記の計算式を作り、印刷開始日と刷了日が判明している16世紀の12点と17世紀初頭の11点の印刷部数を算定している。^(注85)

$$\text{印刷部数} = \frac{\text{印刷全紙一面分の1日平均刷り枚数} \times \text{実労働日数}}{\text{印刷全紙一面分の容量合計数} \times 2}$$

$$\text{印刷全紙一面分の容量合計数} = \frac{\text{葉数} \times 2}{\text{判型}}$$

$$\text{印刷全紙一面分の1日平均刷り枚数} = \frac{\text{印刷部数} \times \text{印刷全紙一面分の合計容量数} \times 2}{\text{実労働日数}}$$

実労働日数は印刷開始から刷了までの通算日数から休日を差し引いた日数である。休日は日曜日のほか、皇族（皇帝、皇妃、皇子、皇女たち）の名の日の祝い、暦のうえでの祝祭日である。祝祭日には、日付が確定している「移動しない祝祭日」と斎の期間中の「移動する祝祭日^{ものいみ}」がある。ただし、実際に非労働日だったかどうか確定しきれない日もあるので、アモソフは最小限労働日数と最大限労働日数を想定してそれぞれに対応した1日平均の刷り枚数2,330.9278枚および2,253.4883枚を算出し、印刷されたと考えうるそれぞれの推定部数を提示している（表3）。ロシアでは17世紀のおそくとも40年代には「ひと刷り（^{ザヴォート}завод）」1,200部が規定の印刷部数とされた。部数をふやす場合には原則的には2,400、3,600…とその倍数により印刷された。アモソフの推計による部数はこの「ひと刷り」に近い数字で

〈表3〉『アモソフ論文』p.12より

書名と刊年	判型	葉数	通算日数	最小限 労働日数	最大限 労働日数	全紙一面分の 容量合計数	(注1) 推定部数①	(注2) 推定部数②	(注4) 現存部数
聖使徒経1564	2°	268	318	230	242	268	1,000	1,017	50(62)
小時課経1565	8°	173	54	40	41	43 ¹ / ₄	1,078	1,068	2
〃 1565	8°	172	58	42	46	43	1,138	1,205	5
聖詠経 1568	4°	297	288	206	216	148 ¹ / ₄	1,617	1,639	8
〃 1577	4°	281	226	165	176	140 ¹ / ₄	1,369	1,412	21
三歌斎経1589	2°	470	690	485	503	470	1,203	1,206	41
五旬経 1591	2°	566	456	325	339	566	669	675	32
八調経 1594	2°	976	603	431	451	976	515 ^(注3)	520 ^(注3)	45
聖使徒経1597	2°	323	410	291	301	323	1,050	1,050	26
小時課経1598	8°	248	72	54	54	62	1,015	981	2
総月課経1600	4°	594	392	275	290	297	1,079	1,100	24
〃 1600	2°	340	404	280	295	340	960	978	23

(注1) 最小限労働日数で1日平均刷り枚数2330.9278枚で計算した場合

(注2) 最大限労働日数で 〃 2253.4883枚 〃

(注3) あとがきに明記されていた印刷部数

(注4) 『アモソフ論文』が発表される前年1982年中頃のデータにもとづいている。() 内の数字はその後発見されて増加しているもの。

ある。

1日平均の刷り枚数に関しては17世紀末から18世紀初頭（注86）にかけて2,400枚が規定となっているところからみて、印刷の速度は150年の間あまり変わらなかったものと考えることができる。

ここに示された1日2,000枚をはるかにこえる刷り枚数は、1枚また1枚と手作業で行われる当時の印刷方法を知る人の目には過大な遂行目標とう

つるにちがいない。そこで印刷に関して他の文献を引用しながら多少の説明をしておきたい。

宮下史朗著『本の都市リヨン』（1989年、晶文社）では、リヨンからパリに移ってユマニスト出版業者として成功を収めたジョス・バード（出版活動期間1503—35年）の刊本の扉に使われているかれの工房の印刷作業の図版の解説に続けて次のように述べられている。「1台のプレスについて4～5人がグループをつくり、朝まだ暗いうちから夜遅くまで彼らはひたすら刷りつづけた。信じられないことだが、リヨンの印刷職人たちは何と夜中の2時から明くる夜の10時まで、つまり1日に20時間も働き、日に3,000枚以上を刷り上げても音をあげなかったという。むしろパリ以上の生産性を誇りにしているのだ。今でもそうだがこの仕事はいったんある本の印刷にかかったら、集中して行われなければ極端に能率が落ちてしまう。印刷プレスを遊ばせてはいられないのだ。もっともこんなハードワークが1週間以上も続いたはずがない」（p.139）。

もうひとつの例をみよう。15世紀最大の印刷工房をかまえ1470年から1513

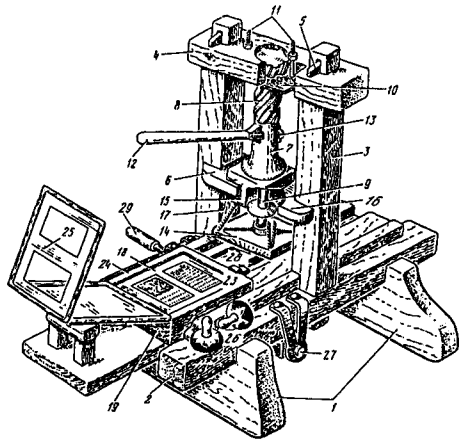


図6 17世紀の印刷機の図解
（『イヴァン・フォードロフ伝』p.233）

年にかけて活躍したニュルンベルクの印刷業者アントン・コー~~ル~~ベルガー^(注87)の工房は、最盛時には24台の印刷機と100人の職人を擁していた。この場合、単純に計算すると印刷機と職人の比率は1:4で事情はあまり変わらない。

ところがロシアの場合は具体例の時代はかなり下るが上記2例とはだいぶ事情が異なってくる。17世紀ロシアの書籍印刷は1640年代に刊行点数、内容ともに最盛期をむかえる。モスクワ印刷所の印刷機もそれを裏づけるように1622年にはわずか6台だったものが、1624年は8台、1629年に9台、1633年には14台と急増している。人員の配置としてはマステルを除いて印刷機ごとに11人のチームが組まれていた。その内訳は植字工2、解版工1、印刷工4、インク塗り工（印刷助手）4であった。またそれぞれの印刷機は^(注88)あたかも独立した印刷所のようにであったという。

さきにあげたふたつの例と17世紀ロシアの印刷機や印刷方法にあまり変わりがなことを前提に考えると、現段階ではとりあえず次のようにまとめうるであろう。ロシアでは印刷機はおそらくまだ輸入に依存していたはずで、外国製の高価な印刷機を多数そろえるかわりに、印刷機1台ごとに多数の職人を配置し、交替で印刷作業をさせていた。いわば、この“人海戦術”ともいうべき職人の配置がつづいていた間は1日2,400枚という規定の達成はおおむね可能だったのではないかと。ただし、この点についてはなお今後の研究課題としておきたい。

(3) ヨーロッパの書籍印刷との若干の比較

16世紀の章を終るにあたり、日本の研究者による著作および翻訳書からいくつかの例をひき、ロシアの書籍印刷の到達点との数量的及び内容的な比較材料を示しておく。これは、革命前のロシア時代には単に印刷のマステルと考えられていたイヴァン・フォードロフ^(注89)ひとりを恣意的に偉大な人物像に仕立てあげ、「ルネサンス期の巨人のひとり」とまでいうソ連邦時代の研究のあり方への筆者からの批判と疑問の表明でもある。

①15世紀中の書籍印刷全体との比較

本来ならば16世紀の書籍印刷の統計との比較をしたいところであるが、

16世紀は数量が多くその全体を把握する研究はまだない。したがって研究がすすんでいる15世紀の統計を提示しておく。

〈インキュナブラの統計〉

刊行数約40,000版（点）、1版平均500部印刷、約2,000万部が15世紀中に流布（最大値）、現存は約30,000版（部数については諸説あり定かではない）と推定されている。分野は、宗教・神学45%、文学30%、法律10%、科学・技術10%。

以上は〈はじめに〉の項でも引用した『雪嶋報告』^(注8)による。

②ひとつの都市との比較

前出の『本の都市リヨン』の表7（p.144）はパリとリヨンの1500—1600年の出版点数の推移を折れ線グラフで紹介している。このグラフによれば1540—1560年のリヨンの出版点数は年間100点をこえ、パリでは1540年からは1590年まで年間200点をこえていた。

また黄金時代をむかえていたりヨンの出版業について「毎年三桁以上の書物が世に送られ、500人から600人がこの産業に従事していたものと推定されている。当時の人口は六万かそこら（上限で八万人）だから約1%の人々が書物の世界で生きていた計算になる。」（p.168）と述べている。

③ひとりの印刷業者（ひとつの印刷所）との比較

アントン・コー^{mv}ベルガー（印刷活動期間1470—1504）の印刷工房は前述のとおり最盛期には印刷機24台、職人100人を擁していた。そして1470—1504年の間だけで220版^(注8)を刊行している。

また、ジョス・バード（出版活動期間1503—1535）の印刷工房は700有余点を刊行している。（『本の都市リヨン』p.88）

④ひとつのベストセラーとの比較

宗教改革に挑んだマルチン・ルターの翻訳による『新約聖書』は、当時としてはたいへんなベストセラーであった。1522—1533年の間に高地ドイツ語で14回、低地ドイツ語で7回印刷され、かれの生存中に合計で10万部以上が出版された。さらに数多くの「翻刻版」（いわゆる海賊版）が

出されたため実際の数はずっと多くなるが正確な記録はない。(戸叶勝也著『ドイツ出版の社会史』三修社、1992年、p.47—48)。

⑤16世紀のロシアの書籍印刷の数量的到達点

19版(点)、1版平均約1,060部印刷(アモソフの推定数の単純平均)、16世紀中に流布したと考えられる数約20,000部、分野はすべて奉神礼書である。

注 記

*ここに掲載された「第1章」および「第2章」は1993年10月25日に一橋大学社会科学古典資料センター主催の「第13回西洋社会科学古典資料講習会」で行った講義、ならびに1994年3月12日に私立大学図書館協会西洋古版本分科会で行った研究発表の前半部分に加筆・訂正したものである。

**文献を利用させていただいた図書館は早稲田大学中央図書館、慶応義塾大学、一橋大学、東京外国語大学の各図書館、国立国会図書館ならびに日ソ図書館である。そのほかに、北海道大学図書館およびスラウ研究所、天理図書館にもそれぞれ赴いて調査をさせていただいた。

***上記の図書館で所蔵が確認できなかった文献に関しては、ロシア国立図書館(旧レーニン図書館)から現物またはマイクロフィルムによる貸出しをしていただいた。

****典拠とした外国語の文献にはできるだけ請求記号を付すようにしたが、所蔵図書館名がないものはすべて早稲田大学中央図書館の所蔵である。

*****ロシアは988年または989年にギリシア正教を国教と定めているため、文中に出てくるキリスト教に関する言葉は特に断わらない限りすべてギリシア正教の表現である。ギリシア正教ではカトリックと異なる用語を使用しているが、筆者が日常的に使用している5種類の露和辞典の間で訳語のちがいがあり、見当らない語も多いため、お茶の水にある東京復活大聖堂教会(通称ニコライ堂)の水口神父にご教示いただいた訳語に拠っている。(注1参照)

注

1. 以下の訳語是水口神父のご教示によるもの。見出し語は現代の研究書に示されたロシア語で、刊行時の教会スラウ語はカッコ内に示した。

なお、ごく簡単な内容説明を付したが1—⑧、1—⑩および1—⑪以外是高橋保行著『ギリシア正教』(講談社学術文庫)に拠っている。詳しくは同書を参照されたい。

- 1-① Апостол (Апостоль) ^{せいしとけい} 聖使徒経。使徒行伝と聖使徒の書簡が含まれている。従来は「使徒行伝」と訳されることが多かったが、これは正確ではない。
- 1-② Октоих (Осмогласникъ, Октоихъ) ^{はつちようけい} 八調経。毎日に指定された祈禱文が掲載されている。7日分でひと組になり、調と呼ばれる。週の周期は8週あるので、毎週毎日の祈禱文が掲載されている。一調から八調までである。
- 1-③ Часослов (Часословецъ) ^{じかけい} 時課経。主に誦経者や聖歌を歌う者が必要とする祈禱書。夜半課、早課、時課、ティピカ、食事の時の祈禱、晩歌、晩堂歌（大、小）、主日、祭日に必要な聖歌、常に必要な聖歌が掲載されている。
- 1-④ Триодъ Постная (Триодъ постная) ^{さんみさいけい} 三歌斎経。大斎期間中に使用される祈禱書。税吏とパリサイ人の週から受難週間聖大土曜日までの全祈禱文が掲載されている。
- 1-⑤ Триодъ цветная (триодъ цветная) ^{こじゆんけい} 五旬経。三歌斎経に対し、花の三歌経などとも呼ばれる。復活大祭から五旬祭までの祈禱が掲載されている。復活大祭から50日間だけ使用される。
- 1-⑥ Псалтирь с воследованием (Псалтирь съ возследованиѣмъ) ^{せいまいけい} 聖詠経（補足付き）。旧約聖書の中の詩篇の書全巻が入っている。
- 1-⑦ Требник (Требникъ) 聖事経。洗礼、婚礼、記念その他、信者の求めに応じて行われる儀式のための祈りの句を記したもの。
- 1-⑧ Евангелие (Четвероевангеліе) ^{よくいんけい} 福音経。マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝の四福音書が入っている。カッコ内の教会スラヴ語は「四つの福音書」の意。
- 1-⑨ Часовник (Часовникъ) 水口神父のご教示によれば、これは時課経の一部が省略されたものだが現在は使われていない。あえて訳すならば〔小時課経〕とのこと。したがって本稿では『小時課経』とする。
- 1-⑩ Минейная (同じ) ^{そらげつ} 総月課経。
2. У истоков русского книгопечатания [Под ред. М. Н. Тихомирова и др] М., 1959. (以下、『始まり』と略す)〔請求記号 ZA-716〕
3. 400 лет русского книгопечатания 1564—1964. [т. 1—2] М., 1964. 2 т.
第1巻は1564—1917年でА.А.Сидоров編、第2巻は1917—1964年のソ連邦時代を対象としておりА.И.Назаров編。本論で引用するのはすべて第1巻である。
(以下『400年史』と略す)〔請求記号 ZA-747〕
4. Зернова, А.С.: Книги кирилловской печати изданные в Москве в XVI-XVII веках; сводный каталог; под ред. Н.П.Киселева. М., 1958. (以下、『ジョールノヴァの総目録』と略す)〔請求記号 ZA-729〕
5. Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века 1725—1800. Ред. коллегия: И.П.Кондакова и др. Составители: Е.И.Кацпржак и др. т. 1—5. М., 1962—

1966. и доп. том 1975. これは1708年にピョートル1世（大帝）の時代、1708年
に行われた文字改革で、従来のキリル文字にかわって使用されるようになった俗
用文字（表2参照）による出版物だけの総目録。〔請求記号 ZB-1062〕

6. Книга; исследования и материалы. 1959—(以下、『書籍：研究と資料』第◇集、
出版年／著書、論文名、と記す)〔請求記号 ZA-721〕

7. 統一したシリーズ名が記載されておらず、そのうえ装丁もまちまちで背文
字もないため日本の図書館ではほとんど同一の論文集として扱われていない。
識別するための情報は序文の脚注にある。1987年に刊行された第03集に第04集
までのリストが掲載されているので、それにもとづき早稲田大学中央図書館お
よび国会図書館で利用したもののみ以下簡略に記す。なお、便宜上シリーズ名
を「科学アカデミー図書館学術論文集」としておく。

(第5集) История книги и издательского дела. 1977〔国会図書館請求記号 UE31-
26〕

(第8集) Книжное дело в России в XVI-XIX веках. 1980.〔請求記号 ZA-876〕

(第10集) Книга и библиотеки в России в XIV-первой половине XIX века. 1982〔請
求記号 ZC-1292〕

(第12集) Книга и книготорговля в России в XVI-XVIII вв. 1984〔請求記号
ZA-1059〕

(第13集) Книга и её распространение в России в XVI-XVIII вв. 1985〔請求記号
ZA-1070〕

(第15号) Книга в России, XVI-середина XIX в. 1987.〔請求記号 ZA-921〕

8. 「インキュナブラ調査法」 私立大学図書館協会西洋古版本分科会報告。
1993年5月15日、慶応義塾図書館A Vホールにて。(以下、『雪鳴報告』と略
す)

9. Proctor, R.: An index to the early printed Books in the British Museum :
from the invention of printing to the year 1500. With notes of those in the
Bodleian Library. [1898]〔請求記号 ZB-1950〕

10—① Францыск Скарына: зборнік дакументаў і матэрыялаў. Мінск. 1988. p.302 (以
下、『スコリーナ：記録と資料集』と略す)。

10—② 同上。p. 7

10—③ " p. 8, 57

10—④ " p.58

10—⑤ " p.10

10—⑥ " p.63-71

10—⑦ " p.10

10—⑧ " p.11

- 10—⑨ " p.12
 10—⑩ " p.13
 10—⑪ " p.201-204
 10—⑫ " p.16
 11. 『400年史』 p.99（ベラルーシの章）および同書 p.111（リトワの章）
 12—① ステファン・キエニエーヴィチ編／加藤一夫・水島孝生共訳『ポーランド史（全2巻）』（恒文社、1986年刊）第1巻，p.154-155
 12—② 同上。p.157，200
 13. Книга Беларусі, 1517—1917 ; зводны каталог. Мінск, 1986. p.37-48（1. Библия. no. 1 / 1—1 / 23）。
 なお、『スコリーナ：文書と資料集』では《Книги Царств.（列王紀）》p.238-247 を4分冊・4項目ではなく1項目の扱いにしているため全体が20項目になっている（ZB-2005）**請求記号**
 14. 同上。p.48-54（2. Малая подорожная книжка. no. 2 / 1—2 / 22）。
 15. Enciclopedia de México. Tomo 12. México, 1977. p.173〔請求記号 ZE-97842〕

16. 木村彰一著『古代教会スラブ語入門』（白水社、1985年）によれば、グラゴール文字は9世紀後半に東ローマ帝国の伝道者コンスタンティノス（修道士名キュリロス）とその兄メトディオス、さらにその弟子たちの協力によってモラヴィア（現チェコ領）伝道のために制定された古代教会スラブ語とあわせて考案されたと推定されている（p.19）。そしてキリル文字にとって代わられるまでは、9世紀から11世紀にかけてモラヴィアからバルカンにいたる広い地域に流布していた（p.33）。

ロシアではグラゴール文字は普及せず、10世紀に伝えられたキリル文字が広まった。

「クロアチアおよびダルマチアのアドリア海沿岸地方では、現在なお一部カトリックの司祭たちによって（ラテン文字および）グラゴール文字による教会スラブ語のミサ典書が用いられている。」（p.22）

17. 同上。p.33「キリル文字はグラゴール文字にややおくれで、9世紀のおわり、ギリシャ文化の大的愛好者であったスュメオンの治世中に、東部ブルガリアで用いられだしたものと思われる。考案者は司祭コンスタンティンともいうが、確証はない。このアルファベットは10世紀にはロシアに伝わり、11世紀以後バルカンのギリシャ正教を奉ずるスラブ人の間でもしだいにグラゴール文字を圧倒して用いられるようになった」。

なお、現在使用されているロシア文字は、1708年にピョートル1世がキリル文字を改革して制定した**非教会（俗用）**文字が基礎となっている。

18. 『書籍：研究と資料』第2集。1960／Varbanec, H.B. и др., Славянские инкунабулы в собрании государственной публичной библиотеки... p.206 [慶応義塾大学図書館所蔵]
19. Каратаев, И.П., Описание славяно-русских книг, напечатанных кирилловскими буквами. Т.1: с 1491 по 1652 гг. СПб. 1883. p. 1-14 (no. 1-5) (以下、『カラターエフの記述目録』と略す)
20. 『400年史』p.15
21. 『カラターエフの記述目録』p.14-18 (no. 6, 7)
22. 『400年史』p.16
23. Ундольский, В.М., Очерк славяно-русской библиографии. М., 1871. p. 1 (no. 8) (以下、『ウンドーリスキの編年目録』と略す)。ただし『カラターエフの記述目録』はこの『八調経』を対象外としている。
24. 『カラターエフの記述目録』p.22 (no. 9)
25. 同上。p.15 (no. 6)。なおカラターエフ以前に『ウンドーリスキの編年目録』p. 1 (no. 6) でも簡単にではあるが同じことにふれている。
26. 『400年史』p.16
27. W. H.マクルーネ著／清水廣一郎訳『ヴェネツィア』(岩波現代選書、1979年刊)、p.190-191
28. 『始まり』p.11
29. История отечества в лица. С древнейших времен до конца XVII в. М., 1993. p.51
30. 同上および Синицына, Н.В., Максим Грек в России. М., 1977. p. 3
ただし、Русский язык. Энциклопедия. М., 1979. p.136では生年が1475年頃、没年が1556年とされている。
31. アーサー・ヴォイス著・白石治朗訳『モスクワとロシア文化の源流』(恒文社、1981年) p.23. 原著は Voice, A., Moscow and the Roots of Russian culture. 1964. p.13 [請求記号 AD-6029]
32. 同上。p.37 原著はp.27
33. Похлебкин, В.В., Внешняя политика Руси, России и СССР за 1000 лет в именах, датах, фактах: Вып. 1. М., 1992. p.33
34. 『書籍：研究と資料』第2集。1960／Киселев, Н.П., О московском книгопечатании XVII века. p.130 (以下、『キセリョーフ論文』と略す)
35. 同上。p.129
36. 『始まり』p.20
37. 同上。p.216
38. Луппов, С.П., Книга в России в XVII веке. Л., 1970. p.48-49 [請求記号 ZA-788]

39. 同上。p.51
40. 『始まり』 p.216-220
41. 同上。p.234-247
42. 同上。p.15-19
43. 同上。p.119-209
44. 同上。p.209-214
45. 同上。p.19
46. 同上。p.19
47. 同上。p.15. チホミーロフは『ロシア年代記作者』のつぎの記述を重要な判断材料のひとつとしている。「1553年。マカーリィ府主教の時代に、モスクワにおいて書籍の印刷が始められた」。
- シードロフは『400年史』でチホミーロフの見解に賛成の立場をとっている。(p.33-40)。
- Книговедение. Энциклопедический словарь. М., 1982 (以下、『書籍百科』と略す) は「1553年頃から1565年頃までの期間稼動していた」(p.21) との見解。〔請求記号 ZA-849〕
- なおジョールノヴァは1555年頃から1568年頃という説をとっている。『ジョールノヴァの総目録』 p.11-14
48. Тихомиров, М. И., Русская культура X-XVIII веков. М., 1968. p.406 〔請求記号 AD-4907〕
49. 『400年史』 p.39
50. 同上。p.39
51. 同上。p.36
52. Мастер. 当時マステルと呼ばれた人たちは単に印刷の技術を身につけていた程度のことにとどまらず、しばしば活字作り、編集、校正、外国語からの翻訳を行うなど書籍印刷全般にかかわる多面的な知識と技術を有していた。このマステルという言葉を一とことで表現できる適当な訳語が見当らない。したがって本稿ではそのまま「マステル」とする。
53. 『400年史』 p.39. ただしチホミーロフは『10—18世紀のロシア文化』の中で「マルシヤ・ネフェーージェフはモスクワからノブゴロドに派遣された」(p.407) と述べている。また「イヴァン・フォードロフ伝」(p.92) も「派遣された」としヴァシエーク・ニキフォロフを彫刻師と述べている。
54. 同上。p.40
55. 「科学アカデミー図書館学術論文集」(第11集)。Русские книги и библиотеки в XVI-первой половине XIX века. Л., 1983. /Амосов, А.А., Заметки о московском старопечатании. К вопросу о тиражах изданий XVI-начала XVII века. p.6 (以下、

『アモソフ論文』と略す)

56. 『400年史』 p.40
57. Немировский, Е.Л., Иван Федоров: около1510—1583. М., 1985. p.299 (以下、
『イヴァン・フョードロフ伝』と略す)
58. 『400年史』 p.19
59. 同上。p.15
60. 同上。p.34
61. Советская историческая энциклопедия. т. 11. М., 1968. p.124 [請求記号 AA—
3267(1)]
62. 『書籍百科』 p.362
63. История москвы в шести томах, Приложение (планы) к т.1. М., 1952. /Москва
около середины XVII века. в китай-городе (no.12) の位置。[請求記号 AD—
4771 (1 : K)]

なおニコリスカヤ通りは1993年にモスクワで出版された『モスクワの通り
便覧』によれば1930—1990年の間は10月革命の記念日にちなんで「10月25日通
り」と呼ばれていた。(p.268)。ただし『モスクワ百科』では「10月25日通り」
となるのは1935年からである。(Москва. Энциклопедия. М., 1980. p.457 [請求記
号 HC-2077])

64. 『始まり』 p.39
65. 『キセリョーフ論文』 p.127
66. 当時はアラビア数字を使うことは異端とみなされ、キリル文字を代用して
いた。アラビア数字の使用は18世紀に入ってからのことである。キリル文字を
数字として使う場合はKのように文字の上に横線を引いて区別した。
ちなみにふれておくとチホミーロフはアノニウムナヤ・チボグラフィヤ時代
の『三歌斎経』のページが219から230にとんでいることについて、これはK
(20) とすべきところをЛ (30) と誤植したことによるページの欠落であると
説明している。(『始まり』 p.25)
67. Запаско, А.П., Художественное наследие Ивана Федорова. Львов. 1974. p.11 (p.
81までの本文はウクライナ語とロシア語の対訳。p.88-220のアルバムの部分は
その他に英、仏、独語を加えて5つの言語による説明が付されている)。
68. ルッポフが1983年に研究発表した「新資料」は例外的な存在である。これ
は1727年にペテルブルグに開設された科学アカデミー印刷所(国営)の1741—
1765年の25年間に関する研究で、その中心となる「新資料」は1753年12月まで
に外国語、ロシア語両部門の責任者アレクセイ・バルソフが科学アカデミー総
裁の質問に答えた内容を一覧表にしたもの。表には外国語部門3台、ロシア語
部門8台、計11台の印刷機それぞれに組まれたチームの人名、職種、在職期間、

賃金（年俸）、それぞれの印刷機がその時点でとりこんでいた出版物名が明らかにされている。「科学アカデミー図書館学術論文集」（第11集）。著者・論文名はЛуппов, С.П., Типография петербургской академии наук в 1741—1765 гг.: Новые Данные.

69. 『始まり』 p.13
70. Зимин, А.А., и др., Россия времени Ивана Грозного. М., 1982. p.104. ジミーんらは、Скрынников, Р.Г., Иван Грозный. М., 1975. p.101（邦訳：R.G.スクルィンニコフ著／栗生沢猛夫訳『イヴァン雷帝』成文社，1994年刊，p.146）で「全国庫財産」となっていることに対し、自分のという限定を示して二重カッコで強調している。
71. 『始まり』 p.235
72. 『イヴァン・フョードロフ伝』 p.299
73. 『400年史』 p.45
74. 同上。p.45
75. 『キセリョーフ論文』 p.130
76. 『書籍：研究と資料』第14集，1967／Каменева, Т.Н., Неизвестное издание московской печати XVI века. p.134（以下、カーメネヴァ論文』と略す）
77. 同上。p.143
78. 『キセリョーフ論文』 p.130
79. 『カーメネヴァ論文』 p.143
80. 『400年』 p.46
81. 『カーメネヴァ論文』 p.134
82. 『キセリョーフ論文』 p.130
83. 同上。p.130
84. 『カラターエフの記述目録』 p.277 (no.150)
85. 『アモースフ論文』 p.12.なお、ネミローフスキは『イヴァン・フョードロフ伝』 p.103及び Федоровские чтения; 1983. М., 1987. p.15〔請求記号 ZA-847〕において、1564年版『聖使徒経』の印刷部数が「2,000部をこえる」と推定している。その根拠は1,050部印刷された1597年版『聖使徒経』の現存部数26部と対比して、1564年版『聖使徒経』は現存部数が62部だから印刷部数は2,000部をこえるだろうというもの。しかしながら、この考え方にはなんら合理性はない。〈表3〉でみるように現存が確認されている部数は出版物により大きな差があり、数字そのものも変わりうるので算定の根拠にはならない。現に1564年版の現存確認部数は1974年47部，1982年50部，1985年62部と変化してきている。
86. 同上。p.7

87. エイドリアン・ウイルソン著／河合忠信・雪嶋宏一・佐川美智子訳『ニュルンベルク年代記の誕生』雄松堂、1993年 p.176
88. Луппов, С.П., Книга в России в XVII веке. Л., 1970. p.32 [請求記号 AZ-788]
89. 『イヴァン・フォードロフ伝』p.5

〈本文及び注に書名を掲げていない参考文献〉

1. 岩間徹編『ロシア史（増補改訂版）』山川出版社、1992年。
2. 森安達也著『ビザンツとロシア・東欧』講談社、1985年。
3. 佐藤靖彦訳『ロシアの家庭訓（ドモストロイ）』新読書社、1984年
4. R. ヒングリー著／川端香男里訳『19世紀ロシアの作家と社会』中公文庫、1984年
5. 中井和夫著『ウクライナ語入門』大学書林、1991年。
6. 『ヘブライ語入門』キリスト聖書塾、1958年
7. 森田鉄郎編『イタリア史』山川出版社、1976年。
8. ピエール・アントネッティ著／中島昭和・渡部容子訳『フィレンツェ史』白水社、1986年
9. グイド・ザッカニーニ著／児玉善仁訳『中世イタリアの大学生活』平凡社、1990年
10. H. ラシュドール著／横尾壮英訳『大学の起原：ヨーロッパ中世大学史』上・中・下。東洋館出版社、1966—1968。
11. 高野彰著『洋書の話』丸善、1991年。
12. Кобрин, В.Б., Иван Грозный. М., 1989.
13. Владимирив, Л.И., Всеобщая история книги. М., 1988.
14. Франциск Скорина—белорусский гуманист, просветитель, первопечатник. Минск, 1989,
15. Библия. М., 1992.

(いわた ゆきお 校友・ナウカ株式会社)

今回の電子的公開に際し、

加筆・訂正を行った。

2017年3月28日 岩田行雄